

最優秀に日本地下水開発

山形広告賞 優秀賞には県花笠協議会

山形広告協会（会長・寒河江浩二山形新聞社長）主催の第12回山形広告賞の選考会が24日、山形市の山形メディアタワーで開かれた。審査の結果、最優秀賞に日本地下水開発（山形市）の新聞広告「2020年賀広告『15℃って』」が、優秀賞には県花笠協議会（同）の同「『AR紙面

花笠の灯をつなごう特集』」がそれぞれ選ばれた。20年中に掲載、放送、発表された新聞や雑誌、ポスター、テレビ、ラジオの広告作品が対象で、今回はプリント部門に31点（新聞広告30点、ポスター1点）、電波部門に11点（テレビCM8点、ラジオCM3点）がそれぞれ寄せられた。

東北芸術工科大グラフィックデザイン学科の赤沼明男准教授を選考委員長に、広告主や媒体、印刷業界、デザイナー、広告代理店の代表10人が▽広告目的、主張が明確▽読者、視聴者の共感と理解を呼ぶ▽アイデア、獨創性にあふれている—を基準に選んだ。

最優秀賞に輝いた日本地下水開発の「15℃って」はSDGs（持続可能な開発目標）や、深さ100メートルの地中が温度15度前後で安定し冬に暖かく夏に涼しいことに触れ、環境問題の解決に取り組み地球に優しいシステムを開発する企業であることを表現。写真とコピーを大きく使い、目を引くデザインにした。県花笠協議会の新聞広告は新型コロナウイルスの影響で中止にした「山



山形広告賞の応募作品を審査する選考委員

山形市・山形メディアタワー

形花笠まつり」への思いを写真で表し、スマートフォンをかざすと花笠踊りの映像が見られるAR（拡張現実）機能も入れた。

全体の講評で赤沼委員長は「暗い世情なので、広告は世の中を元気に明るくする要素があるといい。アイデア、獨創性に富んだ作品が増えることを期待する」と述べた。

表彰式は7月に、山形広告協会の総会の席上で行われる予定。最優秀、優秀の両作品は全日本広告連盟主催の全広連鈴木三郎助地域キャンペーン大賞・地域クリエティブ大賞に山形広告協会推薦作品として応募する。
（菅原武史）